長崎大学教育学部紀要－教育科学－　第71号　49～59（2007年３月）

小学生の攻撃性に関する研究

朝長　昌三・福井　昭史・小島　道生
中村　千秋・小原　達朗・柳田　泰典

The Study on Aggressiveness of Elementary School Children

Shozo TOMONAGA, Akifumi FUKUI, Michio KOJIMA,
Chiaki NAKAMURA, Tatsuro OBARA, and Yasunori YANAGIDA

今日，学校，家庭，地域において，子どもの攻撃性が問題とされている．文部科学省（2006）が平成17年度における児童生徒の問題行動等の状況について発表したところによると，公立小学校の児童が起こした暴力行為は学校内では2018件，学校外では158件であった．また暴力行為の形態としては，生徒間暴力が1073件で最も多く，次に器物損壊，対教師暴力，対人暴力となっている．

また文部科学省（2006）は突発性攻撃的行動及び衝動，いわゆるキレた子どもの性格的傾向を(1)耐性欠如型，(2)攻撃型，(3)不満型に分類し，キレた子どもについて調査した．その結果，キレた子どものうち87.8%が男子で，12.2%が女子であった．また耐性欠如型は70.3%，不満型は30.1%で，攻撃型はその中間であったとしている．さらに，耐性欠如型と攻撃型は男子に多く，不満型は女子にやや多い傾向という結果であった．

朝長ら（2006）は小学生の攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃から検討し，以下のような結果を得た．表出性攻撃の強い男児は４年生で約25%，５年生で約22%，６年生で約25%であった．女児では４年生で約16%，５年生で約33%，６年生で約33%であった．不表出性の強い男児は４年生で約34%，５年生で約26%，６年生で約26%であった．女児では４年生で約30%，５年生で約26%，６年生で約22%であった．さらに，表出性攻撃も不表出性攻撃も強い４年生男児は約13%で，女児は約10%であった．５年生男児は約10%で，女児は約10%であった．また６年生男児は約10%で，女児は約９%であった．それに対して，表出性攻撃も不表出性攻撃も弱い４年生男児は約13%で，女児は約14%であった．５年生男児は約15%で，女児は約14%であった．また６年生男児は約10%で，女児は約９%であった．

以上のように得た児童の攻撃性に関する傾向をさらに検討するために，2005年度に行った同じ５小学校の児童に対して調査を行った．

方　法

被験者は，長崎市および近郊の小学生1110名（男児557名，女児553名）であった．

４年生は男児が194名，女児が155名，５年生は男児が167名，女児が197名，６年生は男

児が196名，女児は201名であった．

調査は，小学生用攻撃性質問紙（HAQ－C：Hostility－Aggression Questionaire for Children）を用いて行った．

本質問紙は27項目から構成されており，攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃の２面から検討するようになっている．表出性攻撃の項目は４，10，11，12，13，15，20，22で，不表出性攻撃の項目は２，６，８，14，17，19，24，25である．

被験者は各質問項目に対して「まったくあてはまらない」，「あまりあてはまらない」，「よくあてはまる」，「とてもよくあてはまる」の４段階の１つに回答した．

結　果

結果の処理については，以下のように行った．

各質問項目に対して「まったくあてはまらない」には１点，「あまりあてはまらない」には２点，「よくあてはまる」には３点，「とてもよくあてはまる」には４点を加算し，それらの合計点を各被験者の表出性攻撃と不表出性攻撃の代表値として，ｔ－検定を行った．

判定基準に関しては以下のとおりである．

男児の表出性攻撃は「30～32」が「５　非常に強い」，「24～29」が「４　やや強い」，「17～23」が「３　ふつう」，「12～16」が「２　やや弱い」，「８～11」が「１　非常に弱い」である．女児の場合は「29～32」が「５　非常に強い」，「22～28」が「４　やや強い」，「16～21」が「３　ふつう」，「10～15」が「２　やや弱い」，「８～９」が「１　非常に弱い」である．

男児の不表出性攻撃は「27～32」が「５　非常に強い」，「20～26」が「４　やや強い」，「16～19」が「３　ふつう」，「11～15」が「２　やや弱い」，「8～10」が「１　非常に弱い」である．女児の場合は「27～32」が「５　非常に強い」，「20～26」が「４　やや強い」，「15～19」が「３　ふつう」，「11～14」が「２　やや弱い」，「8～10」が「１　非常に弱い」である．

(1)　４～６年生全体の表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

①　男児

表出性攻撃　：$\bar{x}=20.592$（SD＝5.403）

不表出性攻撃：$\bar{x}=17.792$（SD＝4.915）

$t=9.002$　　$p<.01$　　（d f＝1112）

以上のように，男児全体の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，男児全体の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

②　女児

表出性攻撃　：$\bar{x}=18.839$（SD＝5.011）

不表出性攻撃：$\bar{x}=17.385$（SD＝4.621）

$t=5.016$　　$p<.01$　　（d f＝1104）

以上のように，女児全体の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，女児全体の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

(2) 男児の表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

① 4年生

表出性攻撃　：$\bar{x}$＝20.562（SD＝5.720）

不表出性攻撃：$\bar{x}$＝18.500（SD＝4.841）

t ＝3.833　　p ＜.01　　（d f＝386）

以上のように，4年生男児の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，4年生男児の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

② 5年生

表出性攻撃　：$\bar{x}$＝20.892（SD＝5.204）

不表出性攻撃：$\bar{x}$＝17.707（SD＝5.042）

t ＝5.681　　p ＜.01　　（d f＝332）

以上のように，5年生男児の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，5年生男児の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

③ 6年生

表出性攻撃　：$\bar{x}$＝20.367（SD＝5.263）

不表出性攻撃：$\bar{x}$＝17.163（SD＝4.973）

t ＝6.195　　p ＜.01　　（d f＝390）

以上のように，6年生男児の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，6年生男児の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

(3) 女児の表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

① 4年生

表出性攻撃　：$\bar{x}$＝18.000（SD＝4.722）

不表出性攻撃：$\bar{x}$＝17.677（SD＝4.718）

t ＝.602　　有意差なし　　（d f＝386）

以上のように，4年生女児の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差はなかった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

②　5年生

表出性攻撃　：$\bar{x}$＝18.797（SD＝5.193）

不表出性攻撃：$\bar{x}$＝17.543（SD＝4.723）

t＝2.507　　p＜.05　　（d f＝392）

以上のように，5年生女児の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，5年生女児の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

③　6年生

表出性攻撃　：$\bar{x}$＝19.527（SD＝4.967）

不表出性攻撃：$\bar{x}$＝17.005（SD＝4.437）

t＝5.370　　p＜.01　　（d f＝400）

以上のように，6年生女児の表出性攻撃と不表出性攻撃との間には統計的に有意な差があった．すなわち，6年生女児の攻撃性に関しては，表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であった．

判定基準に関しては，表出性攻撃も不表出性攻撃も「ふつう」であった．

(4)　表出性攻撃に関する学年間比較

1）男児

①　4年生×5年生

t＝.570　　有意差なし

②　4年生×6年生

t＝.350　　有意差なし

③　5年生×6年生

t＝.952　　有意差なし

以上のように，男児の表出性攻撃に関しては4年生，5年生，6年生間に統計的に有意な差はなかった．

2）女児

①　4年生×5年生

t＝1.487　　有意差なし

②　4年生×6年生

t＝2.938　（p＜.01）d f＝354

③　5年生×6年生

t＝1.434　　有意差なし

以上のように，女児の表出性攻撃に関しては6年生が最も高く，4年生が最も低く，またこれらの間に統計的に有意な差があった．

(5) 不表出性攻撃に関する学年間比較

1） 男児

① 4年生×5年生

t＝1.523　有意差なし

② 4年生×6年生

t＝2.689（p＜.01）d f＝388

③ 5年生×6年生

t＝1.031　有意差なし

以上のように，男児の不表出性攻撃に関しては4年生が最も高く，6年生が最も低く，統計的にも有意な差があった．

2） 女児

① 4年生×5年生

t＝.265　有意差なし

② 4年生×6年生

t＝1.379　有意差なし

③ 5年生×6年生

t＝1.172　有意差なし

以上のように，女児の不表出性攻撃に関しては4年生が最も高く，6年生が最も低かったが，学年間には統計的に有意な差はなかった．

(6) 性　差

1） 表出性攻撃

① 4～6年生全体

t＝5.604　（p＜.01）　d f＝1108

以上のように，4年生から6年生までの全体の表出性攻撃に関しては，男児の方が女児よりも大で、統計的にも有意であった．

② 4年生

t＝4.487　（p＜.01）　d f＝347

以上のように，4年生の表出性攻撃に関しては男児の方が女児よりも大で，統計的にも有意であった．

③ 5年生

t＝3.832　（p＜.01）　d f＝362

以上のように，5年生の表出性攻撃に関しては男児の方が女児よりも大で，統計的にも有意であった．

④ 6年生

t＝1.636　有意差なし

以上のように，6年生の表出性攻撃に関しては男児の方が大であったが，統計的には有意な差はなかった．

2） 不表出性攻撃

① 4～6年生全体

t ＝1.411　　有意差なし

以上のように，４年生から６年生までの全体の不表出性攻撃に関しては，男児の方が女児よりも大であったが，統計的に有意な差はなかった．

②　４年生

t ＝1.595　　有意差なし

以上のように，４年生の不表出性攻撃に関しては男児の方が大であったが，統計的に有意な差はなかった．

③　５年生

t ＝.319　　有意差なし

以上のように，５年生の不表出性攻撃に関しては男児の方が大であったが，統計的に有意な差はなかった．

④　６年生

t ＝.335　　有意差なし

以上のように，６年生の不表出性攻撃に関しては男児の方が大であったが，統計的に有意な差はなかった．

考　　察

小学生の攻撃性に関しては，攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃の段階で検討するのが適当とされている（山崎ら，2002）．このことから本研究においては，児童の攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃から検討することを目的とした．

(1)　表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

４年生，５年生，６年生全体の攻撃性は，男女ともに「ふつう」であったが，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大であった．すなわち，攻撃誘発刺激に対して怒りを感じたとき，直接的には表に出ない敵意といった不表出性攻撃をとるよりも，身体的攻撃や言語的攻撃さらには短気といった表出性攻撃をとる傾向が大であった．このことは，朝長ら（2006）の得た結果と同様であった．

そこで，判定基準の「４」と「５」を合わせてそれぞれ「強い表出性攻撃」および「強い不表出性攻撃性」，また「１」と「２」を合わせて「弱い表出性攻撃」および「弱い不表出性攻撃」とし，以上の傾向をさらに検討した．

４年生男児においては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」を示した割合は約32％で，「強い不表出性攻撃」を示した割合は約40％であった．さらに，「強い表出性攻撃」と「強い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約19％であった．「強い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」を示した割合は約６％，「強い不表出性攻撃」で「弱い表出性攻撃」の割合は約２％であった．また「弱い表出性攻撃」と「弱い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約11％であった．

４年生女児においては，表出性攻撃と不表出性攻撃との間に有意な差はなかった．また「強い表出性攻撃」を示した女児の割合は約21％で，「強い不表出性攻撃」を示した割合は約34％であった．さらに，「強い表出性攻撃」と「強い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約12％であった．「強い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」の割合は約３％，「強い不表出性攻撃」で「弱い表出性攻撃」の割合は約１％であった．また「弱い表出性攻撃」

と「弱い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約14%であった．

5年生男児においては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」を示した割合は約29%で，「強い不表出性攻撃」を示した割合は約33%であった．さらに，「強い表出性攻撃」と「強い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約17%であった．「強い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」の割合は約3%，「強い不表出性攻撃」で「弱い表出性攻撃」の割合は約1%であった．また「弱い表出性攻撃」と「弱い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約14%であった．

5年生女児においては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」を示した割合は約27%で，「強い不表出性攻撃」を示した割合は約29%であった．さらに，「強い表出性攻撃」と「強い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約12%であった．「強い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」の割合は約5%，「強い不表出性攻撃」で「弱い表出性攻撃」の割合は約2%であった．また「弱い表出性攻撃」と「弱い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約14%であった．

6年生男児においては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」を示した割合は約26%で，「強い不表出性攻撃」を示した割合は約29%であった．さらに，「強い表出性攻撃」と「強い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約12%であった．「強い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」の割合は約6%，「強い不表出性攻撃」で「弱い表出性攻撃」の割合は約1%であった．また「弱い表出性攻撃」と「弱い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約13%であった．

6年生女児においては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」を示した割合は約30%で，「強い不表出性攻撃」を示した割合は約26%であった．さらに，「強い表出性攻撃」と「強い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約10%であった．「強い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」の割合は約6%，「強い不表出性攻撃」で「弱い表出性攻撃」の割合は約5%であった．また「弱い表出性攻撃」と「弱い不表出性攻撃」の両方を示した割合は約9%であった．

以上のように，小学生の攻撃性は表出性攻撃の方が不表出性攻撃よりも大であることがわかった．すなわち，攻撃誘発刺激を受けて怒りを感じたとき，敵意を抱く以上に身体的攻撃や言語的攻撃をとったり，短気を起こしたりする傾向が強いことがわかった．また男児の場合，強い表出性攻撃や強い不表出性攻撃は学年が上がるにつれて漸減傾向がみられたが，女子の場合は強い表出性攻撃は漸増傾向を，不表出性攻撃は漸減傾向を示した．これらの傾向は，朝長ら（2006）の得た結果と同じような傾向であった．

(2) 表出性攻撃に関する学年間比較

男児の表出性攻撃に関しては，学年間に有意な差はなかった．すなわち各学年ともに表出性攻撃の大きさは同じような大きさと考えられた．また「強い表出性攻撃」の出現率からみた場合，4年生は約32%，5年生は約29%，6年生は約26%と減少傾向を示した．さらに「弱い表出性攻撃」の出現率は4年生が約26%，5年生が約22%，6年生が約25%であった．このように男児の場合，怒りを感じたとき強い表出性攻撃は減少傾向を示した．

女児の表出性攻撃に関しては，4年生と6年生との間に有意な差があり，6年生の方が大であったが，他の学年間には有意な差はなかった．また「強い表出性攻撃」の出現率は

4年生が約21%，5年生が約27%，6年生が約30%と増加傾向を示した．「弱い表出性攻撃」の出現率は4年生が28%，5年生が約28%，6年生が約20%であった．このように，女児の場合，学年が上がるにつれて強い表出性攻撃の発現が高まり，逆に弱い表出性攻撃の発現が減少するという傾向がみられた．これらの傾向は，朝長ら（2006）の得た結果と同じような傾向であった．

(3) 不表出性攻撃に関する学年間比較

男児の不表出性攻撃に関しては，4年生と6年生との間に有意な差があり，4年生の方が大であった．他の学年間には有意な差はなかった．また「強い不表出性攻撃」の出現率に関しては4年生が約40%，5年生が約33%，6年生が約29%と減少傾向を示した．それに対して，「弱い不表出性攻撃」の出現率は4年生が約27%，5年生が約34%，6年生が約38%と増加傾向を示した．このように，男児の場合，学年が上がるにつれて強い不表出性攻撃の出現率が減少し，逆に弱い不表出性攻撃の出現率が増加する傾向がみられた．

女児の不表出性攻撃に関しては，学年間に有意な差はなかった．また「強い不表出性攻撃」の出現率は4年生が約34%，5年生が約29%，6年生が約26%と減少傾向を示した．「弱い表出性攻撃」の出現率は4年生が約27%，5年生が約27%，6年生が約28%であった．このように，女児の場合，学年が上がるにつれて強い不表出性攻撃の出現率は減少傾向を示したが，「弱い不表出性攻撃」の出現率はほとんど変わらなかった．

(4) 表出性攻撃に関する性差

4，5，6年生全体の表出性攻撃に関しては，男児の方が女児よりも大で，統計的にも有意であった．

4年生の場合，男児の方が女児よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」の出現率は男児が約32%，女児が約21%であった．それに対して，「弱い表出性攻撃」の出現率は男児が約26%，女児が約28%であった．このように，「強い表出性攻撃」の発現率は男児が高かったが，「弱い表出性攻撃」の出現率はほとんど変わらなかった．

5年生の場合，男児の方が女児よりも大で，統計的にも有意であった．また「強い表出性攻撃」の出現率は男児が約29%，女児が約27%であった．それに対して，「弱い表出性攻撃」の出現率は男児が約22%，女児が約28%であった．このように，「強い表出性攻撃」の発現率はほとんど変わらなかったが，「弱い表出性攻撃」の出現率は女児の方が高いといえた．

6年生の場合，統計的に有意な差はなかった．また「強い表出性攻撃」の出現率は男児が約26%，女児が約30%であった．それに対して，「弱い表出性攻撃」の出現率は男児が約25%，女児が約20%であった．このように，「強い表出性攻撃」の出現率は女児の方が高く，逆に「弱い表出性攻撃」の出現率は男児の方が高かった．

(5) 不表出性攻撃に関する性差

4，5，6年生全体の不表出性攻撃に関しては，統計的に有意な差はなかった．すなわち，怒りを感じたとき，各学年の男女ともに，同程度の敵意を抱いていると考えられた．

4年生の場合，有意な差はなかった．また「強い不表出性攻撃」の出現率は男児が約

40%，女児が約34%であった．それに対して，「弱い不表出性攻撃」の出現率は男児が約27%，女児が約27%であった．このように，「強い不表出性攻撃」の出現率は男児の方が高く，「弱い不表出性攻撃」の出現率は同程度であった．

5年生の場合，有意な差はなかった．また「強い不表出性攻撃」の出現率は男児が約33%，女児が約29%であった．それに対して，「弱い不表出性攻撃」の出現率は男児が約34%，女児が約27%であった．このように，「強い不表出性攻撃」の出現率も「弱い不表出性攻撃」の出現率も男児の方が高かった．

6年生の場合，有意な差はなかった．また「強い不表出性攻撃」の出現率は男児が約29%，女児が約26%であった．それに対して，「弱い不表出性攻撃」の出現率は男児が約38%，女児が約28%であった．このように，「強い不表出性攻撃」の出現率はあまり変わらなかったが，「弱い不表出性攻撃」に関しては男児の方が高かった．

以上のように，身体的攻撃，言語的攻撃，短気である表出性攻撃の強い児童が4年生男児では約32%，5年生で約29%，6年生では約29%，また4年生女児では約21%，5年生では約27%，6年生では約30%という結果であった．敵意である不表出性攻撃の強い児童が4年生男児では約40%，5年生では約33%，6年生では約29%，また4年生女児では約34%，5年生では約29%，6年生では約26%という結果であった．これらの児童に対して，どのような指導を行うのかが今後の課題といえる．

それに対して，攻撃誘発刺激に対して怒りを感じても「弱い表出性攻撃」で「弱い不表出性攻撃」しか示さない男児が4年生では約11%，5年生では約14%，6年生では約13%，また女児では4年生が約14%，5年生が約14%，6年生が約9%という結果であった．怒りを感じても，各学年の10%前後の児童が表出性攻撃も不表出性攻撃ももたないということに対して，どのような指導を行うのかも今後の課題といえる．

要　約

小学生の攻撃性を表出性攻撃と不表出性攻撃から検討し，以下のような結果を得た．

(1)　表出性攻撃と不表出性攻撃の比較

① 4，5，6年生の男児全体の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

② 4年生男児の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

③ 5年生男児の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

④ 6年生男児の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

⑤ 4，5，6年生の女児全体の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

⑥ 4年生女児の攻撃性に関しては，表出性攻撃と不表出性攻撃の間に統計的に有意な差はなかった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

⑦　5年生女児の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

⑧　6年生女児の攻撃性に関しては，表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で，統計的にも有意であった．また判定基準によると，両攻撃性は「ふつう」であった．

(2)　表出性攻撃に関する学年間比較

①　男児の表出性攻撃に関しては4年生，5年生，6年生間に統計的に有意な差はなかった．

②　女児の表出性攻撃に関しては4年生と6年生の間に統計的に有意な差があったが，4年生と5年生間および5年生と6年生間には有意な差はなかった．

(3)　不表出性攻撃に関する学年間比較

①　男児の不表出性攻撃に関しては，4年生と6年生の間に統計的に有意な差があったが，4年生と5年生間および5年生と6年生間には有意な差はなかった．

②　女児の不表出性攻撃に関しては，4年生，5年生，6年生間に統計的に有意な差はなかった．

(4)　表出性攻撃に関する性差

①　4年生から6年生までの全体の表出性攻撃に関する性差は，男児が女児よりも大で，統計的にも有意であった．

②　4年生に関しては，男児が女児よりも大で，統計的にも有意であった．

③　5年生に関しては，男児が女児よりも大で，統計的にも有意であった．

④　6年生に関しては，統計的に有意な差はなかった．

(5)　不表出性攻撃に関する性差

①　4年生から6年生までの全体の表出性攻撃に関する性差は，統計的に有意な差はなかった．

②　4年生に関しては，統計的に有意な差はなかった．

③　5年生に関しては，統計的に有意な差はなかった．

④　5年生に関しては，統計的に有意な差はなかった．

参　考　文　献

市村操一　(2004)　怒りのコントロール　ブレーン出版

神田信彦・酒井久美代・杉山成　(2005)　なぜ攻撃してしまうのか　－　人間の攻撃性　ブレーン出版

木野和代　(2000)　日本人の怒りの表出方法とその対人的影響　心理学研究，　70，No. 6，494－502.

坂井明子・山崎勝之・曽我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子　(2000)　小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性，妥当性の検討　学校保健研究，42，423－433.

坂井明子・山崎勝之　(2004)　小学生用P－R攻撃性質問紙の作成と信頼性，妥当性の検討心理学研究，75，254－261.

坂井明子・山崎勝之　(2004)　小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響　教育心理学研究，52，298－309.

朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典　(2006)　小学生の表出性攻撃と不表出性攻撃に関する研究　長崎大学教育学部紀要，70，81－96.

山崎勝之・坂井明子・曽我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子　(2001)　小学生用攻撃性質問紙（HAQ - C）の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築　鳴門教育大学研究紀要（教育科学編），16，1－10.

山崎勝之　(2002)　攻撃性の行動科学　ナカニシヤ出版

柳田泰典・朝長昌三・中村千秋・小原達朗・福井昭史・小島道生　(2006)　子どもの攻撃性と他者認識　長崎大学教育学部紀要，70，1－15.